

第 42 回埼玉群馬乳腺疾患研究会（北関東医学会，62（1）；96-96，2012）

演題名：10mm 以下の乳癌 53 例の超音波画像に関する検討

演者名：甲斐 敏弘（かい としひろ）

所属：新都心レディースクリニック

抄録

【はじめに】より早期の乳癌を発見するためには乳腺超音波検査で極めて頻繁に遭遇する小さい低エコー像の鑑別が重要である。今回，当院で経験した最大径 10mm 以下の T1aT1b 乳癌 53 例の超音波画像を中心に検討した。

【対象と方法】当院では平成 19 年 5 月の開業から平成 22 年 10 月までの 3 年 6 月間で 363 例の乳癌を経験した。このうち病変の大きさが 10mm 以下であることが病理所見，US 所見で確認できた乳癌 53 例（発見乳癌の 15%）を対象とした。超音波画像は「乳房超音波診断ガイドライン」の超音波検診要精査基準に基づき評価した。超音波装置は東芝製 Aplio XG，使用プローブは PLT-805AT（8MHz），画像システムは東芝情報システム社 DICOM server，東陽テクニカ MammoRead Report System である。

【結果】

53 症例は 29 歳から 84 歳までの中央値 51 歳。病変の大きさは 3mm から 10mm までの平均 6.6mm。US での D/W 比は 0.36 から 1.54 までの平均 0.76 であった。要精査基準で評価すると混合性パターン 2 例，充実性パターン 43 例。充実性パターンではハロー・境界線断裂（group A）22 例，点状高エコー（group B）5 例，DW 比 0.7 以上（group C）18 例，DW 比 0.7 未満（group D）6 例であった。Group D は検診ガイドラインではカテゴリー 2 と判断される症例であり，これらは MMG の所見等がきっかけになった例も多い。

【考察】

10mm 以下の小さい乳癌においても「乳房超音波診断ガイドライン」の要精査基準は有用であるが，視触診や MMG 所見も踏まえた総合的な判断が特に重要であると思われた。